

微睡んだかと思うと、耕介は雨の音で目を覚ました。幾分風も出てきた。夜はまだ明けていない。三時である。枕の近くにデジタルの時計があり、それと読めた。

以前であれば飛び起き、近世政治経済史の研究に掛かるのだったが、妻が亡くなる直前にその第七巻を刊行して以来、張り詰めた気持を失くしていた。手を伸ばせば届くところに、半世紀以上掛けて集めた書籍や資料類があるが、背を向けたまま、遠ざかっていく雨の音に耳を傾けた。

短い睡眠であった割には、それほど疲れはなかった。

「今日も会えるかもしれない」

耕介の心の中を、酸っぱいものが駆け抜けた。二か月前から、決まって起き抜けに感じる稲妻にも似た衝動だった。はじめ耕介は、八十五歳になる自分の内に、そんな感情がまだ潜んでいるなどは、考えもしなかった。

二年前に五十年連れ添った妻を亡くし、百五十坪の敷地内に一人で暮らしている。近くに娘の恵子夫婦が住み、妻の葬儀以降恵子が毎日顔を出してくれたのだが、耕介の方から気儘にしたいと言いつつ出したのだった。

幸い大きな持病を持たず、食べるものの準備や後始末

も、妻を介護する間に見よう見まねで覚えた。飯は炊飯器が炊いてくれるし、味噌汁は好みの田舎味噌を使って季節に合ったものを拵えた。その他の菜は、気の向くままに添えている。億劫に思えた買い出しも、行ってみればナスやキュウリの色合いの違いに気付けられ、トマトやピーマンの色鮮やかさに気持が洗われた。好きな豆腐やモヤシなどを欠かさず求め、味噌汁にした。「お父さんは栄養の偏りはなく、適度の散歩も欠かさないので、心配することなどなさそうね」と恵子が言う。

健康がなによりの自慢だった妻は、四年前市民プールからの帰りに、通学生の自転車避けようとして、大腿骨を骨折したのがもとで寝付いてしまった。介護のプロの手を借りながら、耕介が日常の面倒を看、悪くない状態を保っていた。それが朝になり、隣の蒲団から声がしないのを不審に思い呼び掛けると、既に冷たくなっていたのだった。

救急病院の医師が、「ひどくお悩みでしたか」と切り出したので尋ねると、「自から呼吸を止めてしまわれたのではないでしようか」という説明だった。腑に落ちないので恵子に聞くと、「お母さん、毎晩眠る前には、これ以上誰にも迷惑を掛けることがないよう逝かせてほしいと、祈ってたんですって。誰も迷惑に感じてないし、お父さんだって、今になってお母さんの有り難みが分かることに

なった筈よ。私も近くにいらんだから、安心してたくさん

甘えて頂戴と言ったの」と傍に付き添ってきた耕介が考えもしなかったことを、恵子は知っていた。

それ以来、耕介は研究にも身が入らず、座ったまま資料の同じ頁を一時間も眺めている自分に気付くのがあった。これまで殆どの時間妻の傍にいて、妻のことなら何でも分かつと高を括っていた。自分の存在や研究は、もちろんん妻の希望になると信じて疑わなかったのだった。

耕介は、妻を失い、研究を失った今、自分に残るものは何だろうと思った。妻を看ながら覚えた料理でもなければ、近く来るであろう叙勲の榮譽でもなかった。

眠りに着く前に妻がしていたと同じに、般若心経を唱えているうち、いつか、自分も誰の手をも煩わすことなく、逝かしてほしいと本気で念じ、「出来れば妻の命日である三か月後までにそれを希望する」との願を掛けた。床に入るときは、このまま眠り、再び朝がこないことを願った。

マーケットやコンビニには、週に三度ほど出向いた。最初気にも留めなかったのであるが、コンビニの弁当売り場の若いレジ嬢が、懐かし気に耕介に笑顔を向け、「どうぞお元気で、明日もまた」という挨拶をするのが気になっていた。耕介が店を出るときには、接客中であっても黙礼を送ってくる。物忘れの少ないことが日頃の自信になっていた。

るが、どう考えても彼女と自分の結び付きが分からない。

翌朝がくることがないようにとの願いの方はひとまず置いて、いったい誰なのだろうと考え、どうしても答えが得られないので気が騒ぎ出した。こうなると、生来の学者氣質が顔を出し、確かめずにはいられなくなった。

弁当を求めレジ嬢からいつもどおりの声を掛けられたのだが、店内の棚を眺めながら、彼女が近くにくるのを気長に待った。「私のこと、ご存じでしょうか」彼女が食料品棚に回ってきたタイミングを図り、尋ねてみた。彼女は僅かに驚きを交えた笑顔で会釈し、店の裏口から先に出た。

「申し訳ございません。お客様のことは存じ上げないので。二年前に、定年間近の単身赴任の父を亡くしたのですが、父にたまに会うときの表情と、お客様の表情がどこかとても似ていらつしやる感じで、御迷惑とは存じながら何か故か独りで嬉しくて」彼女は急に鼻声になり、赤らめた目に涙を溜め、深く一札をして店内に戻って行った。

耕介は、今日もコンビニに顔を出してみようと思っっている。彼女の横顔を一目見るだけでいい。「今日も会うことができるのだ」耕介の胸を、何とも熱く酸っぱい思いが過ぎっていった。